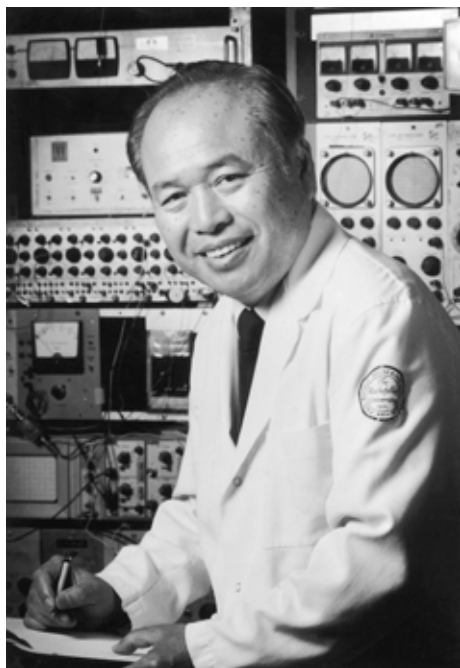


## 浅沼 廣先生を偲んで

和歌山県立医科大学 第一生理学教授

玉井 靖彦

ロックフェラー大学の神経生理学教授、浅沼廣先生が去る2000年8月4日に肺繊維症のため急逝されました。享年74歳でした。先生は、慶應義塾大学医学部をご卒業後、郷里の神戸大学で運動の神経生理学に取り組みました。ロックフェラー大学に留学されたのは1959年で、D.P.C. Lloyd教授のもと、V.B. Brooks, V.Wilson, B. Renshaw博士ら涇々たる神経生理学の先達がおられた研究室です。一時、大阪市立大学生理学教室（古河太郎教授）で講師をされ酒田英夫先生と研究されましたが、1964年に前述のV.B. Brooks準教授が、ニューヨーク医科大学の教授になられたときに、準教授として招かれて再びニューヨークに戻られました。その後、1972年にR. Lorente de No教授の後任としてロックフェラー大学の教授に招聘されました。以後、篠田義一先生を始め日本から多くの留学生を受け入れながら、25年以上にわたってロックフェラー大学の教授として活躍された先生は、運動神経生理学の解明に大きく貢献した先導的な科学者として世界中の研究者から称賛されています。先生の教室の元準教授で、葬儀に際して甲辞を奉読されたR. Mackel博士は、先生の業績を次のようにまとめられていました。まず最初に、皮質内微小刺激技術の確立です。この技術は運動制御の基本的中枢神経機構に関わる浅沼先生の考え方とともに、筋とその運動に関する脳研究に先駆的な道を開きました。現在でもこの技術は広く世界中で使われ、これにともなう微小電極用のマニピュレータの開発にも、先生は大きく貢献されました。もう一つの貢献は、運動中に筋、皮膚および関節で起った情報はその運動を発した所に、一つの閉ループを形成して戻



て来るといふ発見です。この発見は運動の制御の研究に画期的な意味をもたらしました。研究生活の後半には、脳の可塑性と運動の学習に関わる研究にも努力を傾けられました。この研究から脳の可塑的变化は、脳が障害を受けたときのみならず、脳が新しい動きを学習するときにも起ることを示されました。

私は、1982年慶應義塾大学で開催された第59回日本生理学会で初めて先生にお会いしました。春だというのに雪が降っていてとても寒い日でした。先生の特別講演を聞き、その後の懇親会にも参加させていただきました。英語なまりのある日本語でゆっくりと一語一語を噛みしめながら語ら

れる脳の世界に魅了されました。その頃、私は脳幹・脊髄神経生理から脳神経生理への転換を考えておりましたので、すぐに浅沼先生の研究室で勉強したい旨の手紙を書き快く承諾を得ました。1983年のことです。ロックフェラー大学の先生の研究室、カッパールーム（先代の Lorente de No 教授がシールドのために部屋全体に銅板を張り巡らせておられたのでこのように呼ばれていました。）に案内されたときは仰天しました。オシロスコープやアンプ、それに件の微小電極用のマニピュレータが所狭しと並べられ、当時の脳神経電気生理学の真髄にふれ感激したのを思い出します。今でも、微小電極を目的の脳細胞の中に挿入していく時のカチン、カチンという発振音が耳に残っています。顕微鏡下の精密な操作と単純な電極進入操作が交互に何時間も続きます。浅沼先生はその時すでにならぬご年齢でしたが、実験は必ず動物の開頭からデータ整理まで全てご自分でやっておられました。先生の研究態度は今でも心に焼き付き、研究者はかくあるべきを学びました。当時の研究室には、R.S. Waters（テネシー大学教授）、C. Pavlides（ロックフェラー大学助教授）、A. Keller（メリーランド大学準教授）、E. Kosar 先生ら、日本からは、市川眞澄先生ご夫婦、入来篤史先生、坂本尚志先生ご夫婦がおられ楽しくお付き合いさせていただきました。また、研究室には江橋節郎先生、島津浩先生、伊藤正男先生が次々と研究室を訪問され、本郷利憲先生、塚原仲晃先生、森茂美先生は客員教授として招聘されました。

悲しい知らせが電子メールで飛び込んで来たのは8月7日の朝です。翌日の飛行機に飛び乗り、8月9日の葬儀に間に合うようニューヨークに参りました。浅沼先生は先生の強い御希望のもと療養中の自宅で奥様の見守られるなか御逝去されました。お亡くなりになる前夜は、最後まで先生の身近におられた C. Pavlides 助教授と一緒に好きなカクテルを楽しまれたそうです。葬儀はマジソン通りの瀟洒な Campbell Funeral Chapel で執

り行われ、ご家族、教室の先生、隣人の方々が大勢参列されました。目を閉じれば、浅沼先生がお気に入りの執務室（昔、“H.S. Gasser 学長”が使用されていた部屋）でゆっくりとパイプをくゆらせておられた元気なお姿が目につかび、御逝去を現実として受け入れられませんでした。先生を敬慕して集まった留学生は、日本だけではなく、米国内はもとより世界中からです。そのなかから数多くの神経科学者が輩出され、十数名が教授となり現在も各国で活躍されています。浅沼先生のサイエンスに対するスピリッツと情熱は消えることなく、これらの先生方に末長く受け継がれ、また次の世代にも引き継がれることでしょうか。このことはご家族皆様の誇りとなることを確信しています。またその一方では、奥様が浅沼先生を日夜献身的に支えられましたことは申すまでもありません。私ども留学生に対しても、夕食にお招きいただいたり身の回りの世話をさせていただくなど限りない愛情を注いで頂きました。あらためて先生の門下生の一人であったことを誇りに思い、奥様にも心からの感謝を申し上げます。今まで、米国に行く機会があれば、あたかも憩いのある港のごとくニューヨークに立ち寄っては先生を訪問させていただきました。有り難うございました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

最後に僭越ではありますが、先生がロックフェラー大学をご退官なさった時に門下生が投稿して作った記念特集号（Neuroreport Vol 7, No14, pp. 2251-2412, 1996）にのっている浅沼先生の業績集を参考にして、浅沼先生のもとに留学された日本人の先生方を紹介させていただきます。

M. Azuma, T. Hongo, M. Ichikawa, A. Iriki, T. Kaneko, A. Kimura, K. Kubota, E. Miyashita, A. Mori, S. Mori, T. Noda, K. Okamoto, O. Okuda, T. Sakamoto, H. Sakata, Y. Shinoda, Y. Tamai, N. Tsukahara, H. Yumiya

心より敬慕の思いをよせて。